

# 教務だより

2011年10月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

一念岩をも通す 2011

茗溪塾塾長 宇野雅春

受験勉強もいよいよ最終盤に入ってきました。毎年のことですが、受験生の様子を見てみると「一念岩をも通す」という言葉が、頭に浮かびます。特に昨年は、自分から受験に積極的にかかり、最後の最後まであきらめず、「合格」を手にした生徒を沢山見ました。「合格への道」などに、毎回書いていますが、「一念」があるのかなのか...人間を大きく成長させるカギがここにあります。「合格したい」という気持ちが本当に本人の気持ちになった時、思わぬパワーが発揮されるということです。

受験で一番大きく差が開くのは算数と言われています。得意不得意が出る中でも、算数の不得意が一番こたえます。どうしても読んで理解してそれから解くという事になると、荷が重いという事もあります。質問をしても、それすら理解が難しい...途中で嫌になってしまいます。宿題なども、とにかく時間がかかるので、面倒です。先生に聞いて片づけてしまおうという生徒も少なくありません。この一見まじめそうに見えて、先生中心で問題を片づける生徒に、昨今私は、警戒心を持つようになりました。なぜなら、解いて、理解して、力をアップさせているのは先生で、生徒の方は、質問によってはレベルアップがないことに気がついたからです。質問に並んだ瞬間から、おしゃべりをしていたり、極端な場合は、説明を聞いていないように見える生徒もいます。昨年は、そういう生徒に特に注意をし最初からそれを戒めました。

「教えてもらうこと」=「勉強」という考えが、どうしても色濃く子供たちの気持ちの中にはあります。「こんなに勉強しているのに、なぜ成績が上がらないのか？」と親から苦言をもらう事もあります。それはかけている時間の中で、本人が「理解」しようとしている時間がどれだけあるかという問題にかかってきます。現実認識の差がまだ子供たちの中にはあるのはやむを得ないことです。でも毎年、受験最終盤になると、生徒の意識は変わってきます。親が「勉強を続けている子供」を信頼してあげないと、子供たちの、自覚していないまでも芽生えてくる意欲をつぶすことになります。いずれ受験が近づくにつれて、子供たちの意識は大きく変化してきます。昨年、冬期講習あたりでこの変化が見られた生徒は、それなりの苦戦を強いられながらも思わぬ合格を手にしました。不得意な算数に振り回されて、1月中は、希望する学校がことごとくダメだった生徒が、東京都では、受けた千葉、埼玉のどの学校よりもレベルの高い難関校合格を果たしたり、第一志望の千葉県の一次試験で不合格だった生徒が、2月の二次試験で、第一志望の最難関校だけに合格したり、絶対無理と思っていた進学難関校を一発合格したり、今から思い返すと確かに勉強に対する構えの中に本人の「一念」が見えたケースが沢山ありました。受験指導におわれ、山積みする課題に頭を抱えていた冬期講習の最中に、やんちゃながらひたむきに頑張るその子たちを見て、胸がジーンとした瞬間がありました。明らかに子供たちが成長していると感じられたからだと思います。

今年は東日本大震災という大きな出来事に、日本全体が揺るがされた年です。誰もが今までとは違う何かを感じています。学習の場さえ保障されない被災地の受験生もいます。親や兄弟を亡くしたり、親の失業で進学をあきらめたという高校生の話しなども聞きます。こんなときに、「受験」をするという事の意義を考えたいと思います。自分のことは自分でしか解決できません。自分の目標を立て自分の将来を築いていくことは、誰にとっても大切なことです。自分のことをきちんとできなければ、人に尽くすという事は出来ないと思います。受験生は今が人生の岐路です。次から次へと難題が襲ってくると思いますが、まず最初の一步をやりぬくことです。若い君たちには、強い味方、「そうなりたいと思う事」=「一念」が、最も強い武器になります。それを忘れないでほしいと思います。